人文ニュース

今期、人文学部で行われた様々なイベントや主要なニュースをお届けします。

「舌を伸ばした動物」の地上絵をナスカ台地で発見しました。

平成27年度の現地調査において、「舌を伸ばした動物」の地上絵を発見しました。見つかったのはナスカ台地（ペルー共和国イカ県ナスカ市）の中央部で、地上絵の全長は約30メートルあります。胴部には斑点のような文様があり、胴部から足のように見える突起部が多数伸びているのが特徴です。現実の動物を写実的に描いたのではなく、空想上の動物から描かれたと考えられます。

想像復元図

中島宏准教授が3年連続でベストティーチャー賞を受賞！

基盤教育において質の高い授業を提供し、多くの学生に支持される優秀な教員に贈られる「山形大学基盤教育ベストティーチャー賞」の授賞式が7月7日、基盤教育1号館で行われ、3年連続で人文学部の中島宏准教授が受賞しました。

3年連続受賞の中島宏准教授

中島准教授の担当する「日本国憲法」は、楽しく分かりやすい授業として学生に支持され続け、3年連続のベストティーチャー賞に輝きました。

平成28年度のベストティーチャー賞は「学生推薦」のみとなり、中島准教授を含め2名が受賞しました。おめでとうございます！

山口昌樹教授がカザフスタン経営経済大学で講演しました。

山口昌樹教授（国際金融論）は9月26日（月）にカザフスタン経営経済大学において学生、大学院生、教員向けに講演しました。講演のタイトルは“Japanese megabanks in the UK project finance market”で、邦銀の昨今の国際展開を解説しました。50名ほどの聴講者を集めた講演では、報告終了後に日本の銀行システムについての質疑が交わされました。

講演の様子

人文社会科学部オープンキャンパスに1,970名！

「在学生とのつどい」の様子

7月30日（土）に山形大学小白川キャンパスでオープンキャンパスが開催されました。

人文学部は、来年度の学部改組後の『人文社会科学部』としてプログラムを開催しました。人間文化コース、グローバル・スタディーズコース及び総合法律/地域公共政策/経済・マネジメントコースの各「コース説明会」に加え、7名の教員陣による様々な分野の「模擬講義」、教員や現役大学生と勉強やサークル、学生生活などについて直接話ができる「先生とのつどい・在学生とのつどい」、大学ならではの特殊教室を巡る「教室見学ツアー」、短期大学生等を対象とした「編入学説明会」を開催し、ご来場いただいた高校生や保護者の皆様に学部の雰囲気を体験していただきました。

今年は昨年の1,930名を超える1,970名の方にお越しいただき、大盛況となりました。

皆様にとりまして、よりよい進路選択のための参考にしていただけると幸いです。

当日の様子は人文学部facebookにてリアルタイムで配信されました。是非ご覧ください。

サン・カルロス大学の学生が来学しました。

4月28日、協定校のサン・カルロス大学（フィリピン）から、ルイ・パンザラン学長補佐と学生あわせて8名が来学し、清塚学部長、西上副学部長と懇談しました。サン・カルロス大学とは昨年9月に大学間交流協定を締結し、本年2～3月には大学付属の語学学校で、今回で3度目となる海外短期研修（異文化間コミュニケーション実習I）を実施しました。

集合写真

法経政策学科の卒業生が司法試験に合格しました！

法経政策学科（法律コース）卒業生の小山悠さんが、平成28年司法試験に合格しました！小山さんは平成20年4月に人文学部に入学し、在学中は模擬裁判実行委員会の委員長として活躍されました。平成24年3月に本学を卒業後、東北大学法科大学院に進学して勉強に邁進し、今年2回目の挑戦で司法試験合格を見事に勝ち取られました！

小山さん（左）と在学中の指導教員だった中島宏准教授

人文ニュース　第48巻2号

○発行／山形大学人文学部　○編集／人文学部広報委員会　○発行日／平成28年12月16日
〒990-8560　山形市小白川町1-4-12　電話023-628-4203（人文学部事務室）
http://www-h.yamagata-u.ac.jp/faculty/agora.html　E-mail : jisoumu@jm.kj.yamagata-u.ac.jp

※山形大学人文学部の最新情報については、ホームページをご覧ください。http://www-h.yamagata-u.ac.jp

リサイクル適性Ⓐ
この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。

人文学部の今を伝える

Agora

人文ニュース<アゴラ>

“AGORA”とは、ギリシャ語で“広場”という意味です。

48巻2号
山形大学人文学部
2016.12.16

ふぁんたすていっく！

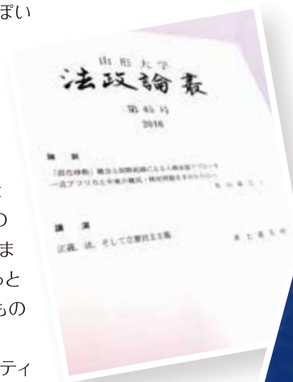
写真で教員の研究を楽しく紹介するコーナー

私の専攻は法哲学です。何となく法に関わっていて、哲学っぽいことをやっているだろうことは想像できるかもしれませんが、一体どんな学問なのでしょうか。正直なところ、私自身にも確たる見通しはありません。「正義とは何か？」という問いについてああでもない、こうでもないと日夜頭を悩ませているのは確かなのですが、この問い自体は別に法哲学者の特権的な専有物ではありません。この問いについて、現実の具体的な法制度を念頭に置き、法学的な発想に一定の尊重を払いながら、考え抜くのが「法哲学する」ことだと、とりあえずいうことができるかもしれません（写真1）。正義への信頼と不信の間でもがきながら（もっとも、これはどの分野であれ法学を学んでいるならば付きまとうものなのでしょうが）。

私自身は、「法哲学する」際に、主にジェンダーやセクシュアリティに関わる法制度を素材にしてきました。哲学は「驚き」から始まるといわれることがありますが、性別の二分法というものへの驚き、その不思議さが研究者の道を選んだことの原点にあります。法制度の中で性がどのように扱われているかを、フェミニズムと呼ばれる思想（であり運動）を主に参照しつつ考えてきましたが、「フェミニズム」という語はひょっとしたら現代日本においては揶揄や嘲笑の対象となることが多いかもしれません。私見では、個々の問題に「答え」を提示しようとしているものとして捉えるなら、フェミニズムにはそれほどの魅力はありません。でも、人々が性別の二分法というものをあたかも自明の前提であるかの如く思考し、行動していることへの新鮮な驚きを常に喚起し続ける「問い」の集合体として捉えるなら、そこには大きな可能性があるように思っています（写真2）。

法哲学のゼミナールでは、各参加者の多彩な関心に応じて、それぞれの仕方で「法哲学する」手助けができればと思っています（写真3）。そのために重要なのが実定法学について（常に経済学や政治学との関係を意識しながら）基礎を着実に学ぶことです。そしてその基礎を学ぶ際には、広い意味での人文学的教養への豊かな関心を絶やさないことが大切です（せっかく山大人文学部にいるのですから!）。実のところ、法学は人文学から生まれたのかもしれない……とこの話をするには字数が尽きました。もし仮にご関心のある方がいらっしゃったら、いつでも研究室にお越しください。

法経政策学科　講師　池田　弘乃



⬅写真1
法哲学の切れ味については、昨年山大で行われたある法哲学者の講演録を是非ご一読ください（『法政論叢』65号所収）。

➡写真2
この論点については、この本に収録されている拙稿をご参照ください。

⬆写真3　ゼミで扱ってきた教材の一例。

山形大学人文学部facebookページぜひご覧ください。

人文学部@LINE開設しました！

平成29年4月から　山形大学人文学部は

人文社会科学部 に生まれ変わります。

新学部の特色

新学部は、人文社会科学の専門性と実践性を結集した教育により、人間の文化と社会を深く、また幅広く理解し、共に創造していくための知識・技能・課題解決力を養います。

コース・学位

2学科8コースから1学科5コースへ

1学科制による人文社会科学の総合的な教育で、専門性を重視しながら、文化や社会科学を幅広く学べる学部に変わります。

- 人文学部
  - 人間文化学科
    - 地域・人間コース
    - 言語コース
    - 文化動態論コース
    - 文化解釈学コース
    - グローバル文化学コース
  - 法経政策学科
    - 法律コース
    - 経済・経営コース
    - 公共政策コース

→

- 人文社会科学部
  - 人文社会科学科
    - 人間文化コース　学士（文学）
    - グローバル・スタディーズコース　学士（学術）
    - 社会科学系コース
      - 総合法律コース　学士（法学）
      - 地域公共政策コース　学士（政策科学）
      - 経済・マネジメントコース　学士（経済学）

●募集は、人間文化コース、グローバル・スタディーズコース、社会科学系コースで行います。

●社会科学系コースは、2年進級時に総合法律コース、地域公共政策コース、経済・マネジメントコースに分かれます。

カリキュラムの特色

専門的なことを深く学ぶと同時に、社会人として活躍するための基礎的な力（英語、情報・統計・調査能力、実践的課題解決能力）の育成を重視したカリキュラムを用意しています。

専門教育

専門知識を修得し、論理的・批判的思考力を身につける

国際水準に基づく専門教育

高年次教養教育

教養と異文化に対する受容能力を身につける

世界や地域の様々な文化や社会制度に関して学ぶ

ジェネリックスキル教育

時代の要請に対応する応用可能な普遍的能力を育成

IT・統計・社会調査科目、外国語科目

基盤教育

「人間力」を養う

3年一貫の学士課程基盤教育プログラム

キャリア教育

社会的・職業的自立へ適切な準備作業

キャリアデザイン、インターンシップ

PBL型授業

アクティブ・ラーニングで実践力を育成

社会実践力を養う多種多彩な実践科目群を導入

取得できる主な資格

- ✓ 中学校教諭一種免許（国語、社会、英語）
- ✓ 高等学校教諭一種免許（国語、地理歴史、公民、英語）
- ✓ 学芸員

この他、所属コースにより、「公認会計士」、「税理士」、「日商簿記検定」、「証券外務員」、「ファイナンシャルプランニング技能士3級」、「司法書士」、「ビジネス実務法務検定」、「社会保険労務士」、「行政書士」、「宅地建物取引士（旧宅地建物取引主任者）」、「地域調査士」、「貿易実務検定C級」、「基本情報技術者」、「日本語教育能力検定試験」、「各種語学検定」などの資格・試験に挑戦することも可能です。また「社会調査士」が取得可能となる予定です。

世界に出て行くには日本を知ろう

渡辺　文生
人間文化学科長・教授
（日本語学）

──渡辺先生は日本語学がご担当ですが、どんなきっかけで日本語学を研究することになったのでしょうか？

もともとは外国語に興味があったのですが、大学院で所属した応用言語学の研究室は、外国語として日本語を研究する留学生の先輩たちがたくさんいらっしゃって、そういう先輩たちに囲まれて研究していくうちに自然な成り行きとして日本語を対象にした研究をするようになりました。

──具体的に日本語学とはどんな学問なのでしょうか？

文字通りには日本語を研究対象とする学問ということになりますが、日本語と言っても、古語から現代語までの歴史的なバリエーション、方言などの地域的なバリエーション、日本人が話す日本語から外国人が話す日本語など、さまざまなバリエーションがありますし、音・単語・文法・意味・文字などさまざまな側面を持っています。それら一つひとつが研究対象になりうるので、全体としてはかなり広い領域にわたると言えます。

──そのような広い領域を持つ日本語学の中で、特に渡辺先生が専門にしている研究はどのようなものですか？

私が主に研究しているのは、談話分析という分野です。私の中心的な研究テーマの一つに、「語り（ナラティブ）」というのがあります。例えば、昨日起こったことや昔の体験などを友達に話すということは、日常よくあることだと思います。あまりにありふれた行為なので、自分自身がどのようにことばを使っているか意識しないかも知れません。しかし、よく考えてみると、人に何かを知ってもらおうとするとき、私たちはさまざまな知識や推論をもとに、ことばを選択し発していることに気づきます。このように、「語り」の研究では、時系列に沿った内容を伝えるときのことばの運用にかかわるさまざまなしくみや要因を明らかにしようとしています。また、そのしくみは言語によっても異なるので、日本語らしい会話のしくみの特徴とは何か、それは他の言語の場合とどのように違うのか、などについても研究しています。

──先生が指導する学生の卒業論文でも、そのような談話分析のテーマが多いのですか？

大学院の修士論文では談話分析に関するテーマが中心ですが、学部の卒業論文はそれだけに限りません。卒業論文のテーマは、現代日本語をデータにしてさえいれば、基本的には学生の興味を優先しています。ですから、テレビドラマのシナリオや、バラエティ番組のインタビューから、商品のネーミング、ロックバンドの歌詞、わらべ歌の歌詞、現代短歌の表現など、いろいろです。留学生の場合は、学習者の視点に立った日本語の研究や自分の母語と日本語を対照する研究が多いです。

──最後に、学生へのメッセージをお願いします。

最近は、グローバル化とかグローバル教育などといったキーワードが盛んに使われて、英語を中心とした外国語の学習が重視されていますが、世界に出て行こうとする若い人たちには、伝統的な日本の技芸を身につけることをお勧めします。外国語を身につけたり、外国に関する知識を持つことは、もちろん大事なことではありますが、外国に行って何か日本のことを教えてくれ、何か日本の紹介をしてくれと言われたときに、何もできないようでは困ってしまいます。

──伝統的な日本の技芸とは、具体的にどんなものですか？

代表的なのは着付けとか茶道、華道、書道などですが、折り紙なんかでもいいと思いますし、空手や合気道などの武道系もいいですね。短期の海外研修でしたら、必ず交流会などで披露する機会があるでしょうし、長期の留学でも「日本のこんなことができる」ということから交流の範囲を広めていくことができると思います。グローバルを目指すには、日本のことを身につけるべしです。

私の研究生活
― 東京、山形、ニュージャージー ―

砂田　洋志
法経政策学科長・教授
（計量経済学・統計学）

──砂田先生は東京都の出身ということでしたが、東京都のどこで育ったのですか。

山形大学へ赴任するまで、多くの時間を東京都練馬区の実家で過ごしました。練馬区と言えば練馬大根が有名です。しかし、小学生の頃にはもう栽培されておらず、私は写真でしか見たことがありません。現在の練馬区は住宅が密集しているだけでなく高層建築物も多いのですが、私が育った頃はまだ緑が多く残っていました。

──先生が詳しいベイズ統計学を研究し始めた経緯を教えてください。

2000年頃の話ですが、当時アメリカで博士号を取得した先生方によってベイズ統計学を用いて実証分析した研究成果が日本の学会で報告され始めていました。その報告を聞いて大きな刺激を受けるとともに、強い関心を抱いて勉強し始めました。かつてのベイズ統計学はいくつかの問題点を抱えていたのですが、コンピュータの性能が進化したことで問題点が克服され、有益な推定方法として外国ではいち早く利用されるようになりました。2000年頃にベイズ統計学を利用する計量経済学者は少数派でしたが、現在は研究者も増えて一般的な推定方法の一つと考えられています。

2002年にアメリカでの在外研究を許可された際には、ベイズ統計学を専門とする先生に受入教員をお願いしました。アメリカでは理論とプログラミングの双方について学ぶことができ、大変有益な時間を過ごすことができました。

──在外研究で訪れたアメリカ・ニュージャージー州の思い出を教えてください。

2002年8月の夕方、ニューヨークの空港に辿り着いてから数日のうちにアメリカでの生活基盤を一人で何とか整えました。日本では不動産屋に行ったこともなかった私がアパートを探し、ケーブルテレビ、ガス、電気にレンタル家具などを電話だけで申し込みました。渡米直後で英語にまだ慣れていない状態にもかかわらず、電話だけで申し込むのは大変でしたが、この経験はその後の人生で大いに自信となりました。自分しか頼れるものがいない状況に置かれてしまえば、普段以上の力が湧いてきて何とかなるものと感じました。

アメリカでは受入教員はもちろん、研究室をシェアしていた研究者もすばらしい方だったため、研究上の相談にのってもらえました。そして、電子ジャーナルを含めて研究に必要な文献が揃っていました（当時の山形大学に電子ジャーナルはありませんでした）。さらに、好きな時間に好きなだけ勉強し続けられました。また、月に何回かは高速バスや自家用車に乗って日系のスーパーマーケットやニューヨークの美術館へ出かけて息抜きをしました。こうしてとても恵まれた研究生活を経験する機会を与えていただいたことに感謝しています。

──現在の研究について教えてください。

東京で大学院生をしていた頃、先物市場における取引価格や取引量について研究していました。現在はコンピュータが発達したこともあり、当時と比べてとても多くのデータが公開されています。そこで、一つ一つの取引のデータ（ティックデータ）を用いて、取引の時間間隔の分析を始めています。この研究には、ノンパラメトリック回帰など今まで手をつけていなかった統計的手法が利用されています。統計学の新たな分野を知る喜びを感じつつ、ゆっくりですが楽しみながら研究しています。

──人文学部の学生にメッセージをお願いします。

大学院生までは自宅から大学へ通っていた私が実家を離れて山形での独り暮らしを始め、さらにアメリカで在外研究を行いました。研究ではベイズ統計学にも手を広げました。私なりに研究環境を変え、研究分野を広げることによって様々なことを経験できました。

学生の皆さんには様々なことに挑戦して欲しいと思っています。大小様々なことが考えられますが、どれも貴重な経験になると思います。

新任教員インタビュー

今年度人文学部に着任した5名の教員に、人文学部のことや山形のことなど
いろいろ聞いてみました!

専門分野について教えてください。

天野　ロシアの歴史、特に日本に近い極東地域の近現代史です。境界をめぐって、勢力範囲をめぐって、日本とロシア・ソ連は戦争を繰り返し、絶望的な犠牲を数多く生み、たくさんの人びとの故郷をお互いに奪い合ってきました。地域の歴史が焼き尽くされ、未来が奪われた事例も少なくありません。ロシア各地で資料を集め、可能な限り現場に足を運び、歴史を記憶している人びとに直接話を聞き、具体的な人びとの暮らしと苦難に光を当てながら歴史の再構成につとめています。

静岡県磐田市出身です。『きてけろくん』に黒ぶち眼鏡をかけると私になります。身長の高さ(188cm)と粘り強さが長所です。

人間文化学科 准教授
大杉 尚之(おおすぎ たかゆき)
(認知心理学、知覚心理学)

大杉　認知心理学が専門です。心理学は、人間の脳や心の働きを調べる学問分野ですが、その中でも特に「ものごとを認識する仕組み」を調べる学問です。実験に参加してもらい、実験結果をもとに認知機能を明らかにします。私は、主に人間の注意機能について、見えているはずのものが不注意により見落とされてしまうメカニズムについて研究をしています。基礎的な研究を行っていますが、将来的には自動車運転中のカーナビ操作や製品のユーザビリティの評価等に役に立つと考えられます。

吉原　専門は中小企業論です。中小企業にヒアリングを行ってその実態を調査し、中小企業ならではの経営のあり方や問題点を明らかにしていきます。特に関心があるのは、人口減少やグローバル化などによって国内製造業が縮小傾向にある中で、新たな取り組みによって成長している中小企業です。中小企業が逆境にどのように立ち向かうのかについて、「中小企業と地域のつながりを活用する」という視点から研究しています。

出身は東京の狛江市です。
子供の頃は、多摩川の河原や田んぼの小川でメダカやザリガニを捕って遊んでいました。黙っていると顔が怖いとよく言われます。本当はそんなに怖くないので、気軽に声をかけてください(笑)。

法経政策学科 教授
荒井 太郎(あらい たろう)
(国際取引法)

荒井　専門分野は、国際取引法です。国際取引法は、国際ビジネスに関連する法律全般ですが、大きく分けて、貿易と事業投資の二つの分野に分けることができます。日本企業の貿易取引や海外事業投資活動(工場運営や販売活動等)に関連する契約・会社経営・M&A・雇用・税務・紛争処理・コンプライアンス等に関する法律問題について研究しています。昨年まで商社の法務部で国際取引法関連の業務を行っていましたが、その経験を学生のみなさんに伝えることができれば嬉しいです。

今村　東南アジアです。東南アジアは素晴らしいところです。仏教徒、キリスト教徒、イスラム教徒が億単位で共存しているところは世界でここだけで、「多文化共生」について学ぶことばかりです。食べ物も美味しく、自然も豊かです。そして人が優しい。
しかし、東南アジアは19世紀末までにほぼ全域が植民地支配下に置かれ、20世紀に入ってからは帝国間の戦争に巻き込まれました。独立後も、いわゆる冷戦期に東西陣営の代理戦争の場になり、また軍事独裁政権下での虐殺など悲惨な出来事が続きました。東南アジアに平和が訪れ、まともな調査ができるようになったのはごく最近のことですが、私の主な調査地であるミャンマー北部ではまだ内戦が続いています。これらの暴力をどう理解するのかが私にとって大きな問いです。

出身は福島県会津若松市、の隣町の会津美里町です。
和菓子屋に生まれ、あんこが食べられない、元北大ケーキ研究会会長です。

人間文化学科 准教授
天野 尚樹(あまの なおき)
(ロシア極東近現代史、サハリン島地域研究)

法経政策学科 准教授
吉原 元子(よしわら もとこ)
(中小企業論、地域産業論)

秋田県鹿角市出身です。山大生がさらに成長できる場をつくるよう頑張りますので、今後ともよろしくお願いします。

人文学部の学生の印象は?

天野　まじめ。とにかく、まじめです。熱心に授業を聴いてくれますし、面白がってくれていたという手ごたえはあります。ですが、これほど授業で笑いがとれなかったことははじめてです(笑)。

荒井　遅刻をする人がほとんどいないので感心しています。毎朝研究室の窓から中庭を眺めていますが、8時半前には学校に来ている人が沢山いるのは素晴らしいことだと思います。

今村　行儀が良い。教員が教室に入ると、私語がピタッと止まるのに驚きました。これは初めての経験でした。

大杉　礼儀正しく実直な印象で、勉強や卒業研究に真面目に向き合っているように感じました。関心が広く、様々な分野に興味を持っている人が多いように思います。

吉原　成長することに対してよい意味で貪欲な学生が多い印象です。提示した課題に対して、粘り強く取り組んで期待以上の成果を出してくれるので、こちらとしてもやりがいを感じます。

山形に住んでみての感想は?

天野　暑い。とにかく、暑かった。記憶にないぐらい久しぶりに日焼けしました。肌が焦げる音がしそうでした。色白がウリだったのですが。おいしいコーヒーとうどんに飢えています。

荒井　美味しい空気と果物を堪能しています。霞城公園を毎朝ジョギングしていますが、早朝の澄み切った空気は最高です。果物では、さくらんぼは勿論ですが、尾花沢スイカとシャインマスカットの美味しさには衝撃を受けました。

今村　食べ物が安くて、美味しい。そばは特においしい。人が優しい。山並みが美しい。温泉が至る所にある。大都市ではないのにオーケストラがあり、多くの映画を上映されている。素晴らしいドキュメンタリーライブラリーがある。夏は短い。いつ来るのかと思っていたら終わっていた。

大杉　山がきれいで近いというのが最初に来た時の感想です。七日町や、馬見ヶ崎川など歩くと楽しいコースが多いので気分転換に非常に良いです。
今年が初めての冬なので、何とか乗り越えたいと思います。

吉原　山形には美味しい食材、珍しい食材がたくさんあって、直売所めぐりをするのが楽しみになっています。次はいい温泉を見つけて、冬を乗りきろうと思います。

山形でチャレンジしてみたいことはありますか?

天野　すべての市町村にあるという温泉を制覇する、チャリで。

荒井　30年ぶりにスキーを再開したいと思います。蔵王の樹氷を見ながら白銀の世界を滑るのが今から楽しみです。

今村　退職までに山形弁のリスニング力を中級程度までに伸ばすこと。

大杉　まずは芋煮会への参加です(笑)。長期的には、様々な研究分野の先生と協力して、学際性豊かな研究・教育活動をしたいです。

吉原　出羽三山をめぐること。

人文学部の学生に望むことは?

天野　たくさん本を読み、たくさんひととと話をし、たくさん映画を観て、少しでいいから心から信頼できる親友をつくり、ひとりでいいから師匠と呼べるひとをみつけ、一度でいいから素敵な恋をしてください。

荒井　人文学部は、いろいろな学問が学習できるのはメリットですが、自分の専門分野を持つことも大切です。大学時代に誰にも負けない専門的な能力を身につけることが重要だと思います。

今村　私たちの社会が直面している大きな問いについて徹底的に考えてみましょう。恥ずかしがらずに、自分の意見を積極的に声に出してみましょう。国外にどんどん出かけて現地の人と仲良くなりましょう。世界は広くて、楽しいところが沢山あります。

大杉　構えずに学問を楽しんでください。部活動、サークル活動、アルバイトと同じ感覚で慣れ親しんで、とことんのめり込んで欲しいです。そして、世界初の発見を目指しましょう。

出身は神奈川県鎌倉市です。
小学校は鶴岡八幡宮の真横にありました。中学卒業以降、25年ほど海外を転々としていました。40代になってようやく日本に戻ってきたので、時々おかしな日本語を使います。この4半世紀の間流行った音楽やテレビドラマなどほとんど全く無知です。
(SMAPだけはかろうじて知っていました)

人間文化学科 准教授
今村 真央(いまむら まさお)
(東南アジア地域論)

吉原　五感を使って学んでください。頭を使うことも大切ですが、まずは動いてみましょう。歩き回って、触れて、人と話して。きっと視界が開けてくるはずです。

異文化間コミュニケーションI 帰国報告

8/27
成田空港発

9/17
成田空港着

Australia
Cairns

コアラを抱いてホームステイ、本場での英語実習

8月27日から9月17日までオーストラリア、ケアンズに学生17名が滞在し、ジェームズ・クック大学での英語実習を終えました。山形大学人文学部によるケアンズでの語学研修プログラムは、今年ですでに5回目となります。キャンパスでの英語集中コースに加え、全員がホームステイを経験し、「使える英語」を身につけてきました。また語学だけではなく、大学附属水族館、世界自然遺産であるグレート・バリア・リーフを訪れ、コアラやカンガルーにも会いました。

異文化間コミュニケーションI（ケアンズ）参加者

向井田美穂	蓬田　紗楽	渡辺満里奈
吉松　里紗	渡邉笑美里	武田　勇大
音喜多幸歩	浦　　綾夏	市川　美咲（理学部）
武山　千紘	熊田　　香	牧野奈々恵（理学部）
中村　愛香	佐藤　友紀	澁谷　麻友（工学部）
松岡　　俊	菅山　　樹	

オーストラリアの中でも新しい大学です。

授業は毎日

オーストラリア独特の豊かな自然を体験すると共に、熱帯雨林やサンゴ礁の保全についても学び、環境問題について皆で考えました。この集中実習「異文化間コミュニケーションI」では、これまで教室で学んできた知識や語学力を実践の場で磨き、実体験を通して異文化理解を深めていく方法の習得を狙いとしています。

ふすま同窓会からの費用援助を受け、実習は無事に終わり、3週間に及ぶ海外体験を通して、実践力と自信を身につけた学生たち全員、笑顔で帰国しました。

ブーメランの投げ方をアボリジニの方から習う

カンガルーにも会いました！

みっちり勉強しました！

ケアンズの豊かな自然を満喫

創業を疑似体験！創業体験プログラム

今年度（平成28年度）は、管理会計演習と会計学演習の合同で創業体験プログラムを実施しています。創業体験プログラムとは、模擬株式会社を設立して、本学の学園祭である「八峰祭」で出店することで、創業、経営、そして決算にいたるまでの会計を学生に疑似体験してもらうものです。このプログラムの目的は、学問と実践のつながりに学生に気づいてもらい、高い学習効果を得ることです。

具体的には、会社の設立登記、事業計画の作成、資金調達、店舗の経営、財務諸表の作成、会計監査、株主総会と企業の清算までを行います。今年5月には司法書士から指導を受けながら株式会社K.Dファイヤーの設立を行い、同じく5月に公認会計士および経営コンサルタントからの特別講義を受けて、事業計画を作成しました。7月には事業計画を発表し、投資家からの資金を集めました。そして本番10月の学園祭当日は、目玉商品の水餃子が好評で、大きな利益を獲得することができました。

同プログラムは、今年度の経験に基づいて、修正・発展させながら継続していく予定です。来年度からは中小企業論演習（吉原元子准教授）も参加し、演習間の競争を行うことも計画しています。

会社として数値目標を明確にかかげていたので、当日は一段とやりがいを感じました！

大成功!!
今まで頑張ってきてよかったぁ～！

当プログラムを通して、会社の仕組みや利益を出すために何を考えるべきかを学び、株主に対する責任の大きさを実感しました。インターンでは学べないような会社の核に迫れたので、大きな強みになったと思います。今回私たちが得たことを後輩たちが受けついで、さらに充実したプログラムにしてくれることを期待しています。

自分たちが開発した水餃子を、たくさんの人においしいと言ってもらえたのが嬉しかった！

地域とともに

人文学部では、学生だけでなく地域の皆様にもご参加いただける公開講座・学術講演会を実施するとともに、地方自治体や海外大学・研究機関とさまざまな交流をしています。

今年度の公開講座

◇前期公開講座（人間文化学科）

映画・写真・絵画・文学における ドキュメンタリーとフィクション

人間文化学科　教授　**富澤　直人**
准教授　**松本　雄一**

前期の公開講座は上記のタイトルで、6月2日から23日までに5回の講座として、人文学部附属映像文化研究所との共催のもと開催しました。一般に当然だと思われている映画と写真の記録性、真実性は本当なのかという、もっとも本質的な問いを立て、「ドキュメンタリーとフィクション」の問題に多様な専門家の視点でアプローチしました。

石澤 靖典 教授「ドキュメンタリーとしての写真」（6月2日）
【内容】本講義では、写真のイメージは果たして現実のままといえるのかについて、ドキュメンタリー写真と呼ばれるジャンルを中心に、現実と虚構の境界を探りました。
【感想】ドキュメンタリー写真からみる現実社会の虚構性に、とても興味を持ちました。写真の見方が深まりそうです。

大久保 清朗 准教授「記録される死、再現される生 ―現代映画における生と死の表象―」（6月6日）
【内容】本講義では、『ある朝の思い出』、『四つのいのち』、『割れたガラス』などの作品をもとに、もっとも根源的な存在様態の表象として、映画の生と死を考えました。
【感想】大衆受けを狙ったものではなく、作者が何かを吐き出したくて産まれた映像作品を、色々見てみたいと思いました。

合田　陽祐　講師「フィクションの書き方　―ジャリの場合―」（6月13日）
【内容】本講義では、突出した才能があるわけでなく、想像力にも乏しい芸術家はどうすれば生き残れるのかという問題について、アルフレッド・ジャリのケースを例に検討しました。
【感想】文学の世界にも計算や駆け引きがあることを、初めて知りました。

元木 幸一 名誉教授「まことうそ　―17世紀オランダ絵画の写実とは―」（6月20日）
【内容】本講義では、フェルメールやレンブラントなどを例に、17世紀オランダ絵画の写実性の謎に迫りました。
【感想】描かれた時代やその状況、風習についての知識があれば、一枚の絵を見ていても、時間旅行ができそうだと思いました。

宮腰 直人 准教授「<あの世>をみてきた人びとの話 ―近世仏教説話における極楽の諸相―」（6月23日）
【内容】本講義では、東北を舞台とする近世仏教説話を出発点にして、文学における<ドキュメンタリー>と<フィクション>の問題を検討しました。
【感想】極楽という存在を証明するのが難しいものについて、どう信じ込ませるかという逆転の発想からドキュメンタリー的に捉える手法が面白いと思いました。

◇後期公開講座（法経政策学科）

リスク社会と危機管理 ―法律・政治・行政の視点から

法経政策学科 教授　**星野　修**

後期の公開講座は、上記のタイトルで、9月20日から10月18日までに5回の講座として開催しました。日本は、災害、国境を超えたパンデミックやテロリズムなど二重、三重のリスクを負った社会です。本講座では、日本社会のこうした現状に鑑み、法制度と政治・行政の視点から、リスク脆弱型社会の現実と課題とを検討しました。

真淵　勝 教授（立命館大学政策科学部）「リスク対応と記憶の継承」（9月20日）
【内容】本講義では、私たちが直面するリスクを正面に据え、「災害先進国」日本として何をなすべきであるかを検討しました。
【感想】どんなことが起きても人はわりと楽観的なのかもしれないと思った。リスク対策のためには教師が、公務員や官僚が、また国民ひとりひとりが、災害の記憶を忘れないことが必要だと思った。

和泉田 保一 准教授「行政法規によるリスク制御」（9月27日）
【内容】本講義では、原子炉の設置規制等を例にして、行政法規によるリスク規制について、その実際や課題について見ました。
【感想】社会的に関心の高い原子力発電所の例を題材にとても解りやすい講義をしていただき、ありがとうございます。

中島　宏 准教授「非常事態と緊急事態条項について考える」（10月4日）
【内容】本講義では、非常事態の概念、国内外の法制度とその運用例等を検討しながら、「非常事態と法」について考えました。
【感想】非常時の「抗命権」について考えなければならないと思った。公務員はそういったことを含めて職につかなくてはならないかなど。

丸山 政己 准教授「リスクとしての国際テロリズム―国際法による対応―」（10月11日）
【内容】本講義では、テロリズムに関する国際法の現状がどうなっているかを把握した上で、その関連で日本社会が抱えている課題とは何かについて考えました。
【感想】国際社会における我が国の役割、行政として何ができるかについて学びたい。

星野　修 教授「リスク社会の文明史論的位想」（10月18日）
【内容】本講義では、リスクを拡大再生産し続ける現代社会の文明史論的位相を考察し、リスク社会の危険性から脱出する隘路を、どこに見出すべきかを探りました。
【感想】現代社会におけるリスクについてのリスク社会論、アクシデント論からの考察に興味をひかれました。

ナスカだより

山形大学人文学部附属ナスカ研究所の最新情報をお知らせします。

ペルー・カトリカ大学に 山形大学サテライトオフィス開所

記者会見の様子

9月2日にペルーのカトリカ大学（PUCP）で、山形大学サテライトオフィスの開所式が開かれました。

山形大学はこれまで、ペルーでのナスカの地上絵研究、ボリビアでの教育活動や人材育成活動、チリでのイチゴ栽培に関する共同研究など、長年にわたり南米の各国と研究・教育実績を積み重ねてきました。山形大学はこれらの実績を基礎に、平成27年度に文部科学省「大学の世界展開力強化事業ー中南米等との大学間交流形成支援」『山形・アンデス諸国ダブル・トライアングル・プログラム』に採択されました。

本プログラムは、南米にあるペルー、ボリビア、チリの主要大学と、山形大学を中心とした山形県内3つの教育機関との間で人材交流を深めながら、各種事業を展開することで、グローバルな人材、両地域でブリッジとなる人材の育成を目指すもので、交換留学、アンデス諸国と日本における語学教育の実施、希望する外国人留学生の県内企業への就職を促します。

この山形大学サテライトオフィスは、同プログラムの南米における拠点として、カトリカ大学の協力により設置されたものであり、今後さらなる交流の促進が期待されます。

（左から）レオン東洋研究センター長、土井准教授、清塚学部長、ルビオ学長

ナスカの一日

山形大学人文学部附属ナスカ研究所　**山本　睦**

ナスカ研究所の朝は早い。通常は6時起床の7時出発で、夜明けとともに行動を開始する。しかし、夏（12月～3月）になると、4時に起床し、5時には調査へ出る。もちろん、周りはまだ暗い。その理由はとても明快で、ナスカ特有の痛いほどの暑さを避けるためである。ナスカのあるペルー南海岸は、極めて乾燥しており、川や水路、畑といった水気のある場所以外は、大半が砂漠である。ちなみに、ナスカ市近郊では、河川にさえも1年のなかでほんの短い期間しか水がない。

2016年度調査メンバー

そのため、とくに夏の調査では、日本人研究者もペルー人考古学者も半分寝ぼけたような状態で集合する。そして、まず屋台のサンドウィッチ屋さんで朝食をとる。眠たいし、みんな静かにしてるかと思うと、それは大間違い。ペルー人たちは、冗談を言い合いながら、ワイワイとご飯を食べる。私が少しでも静かにしていると、「なにかあったの?調子悪いの?」と次々に質問があびせられるほど、彼らのテンションは高い。恐るべしラテンの精神である。

朝食のあとは、現場につくまでの車中で一休みした後、早速調査を開始する。ナスカ台地の調査では、各自が機材を背負い、時には10km以上も地上絵や遺跡を探して、ひたすら歩き回る。休憩するための木陰は一つもなく、あるのは強烈な日差しと砂漠の照り返しだけ。そのため、調査を終える正午あたりになると、さすがに全員ヘトヘトで、睡魔にも襲われる帰りの車中は静まりかえっている。ナスカに戻ったあとは、昼食と少しの休憩を挟んで、再び全員で集まり、データを整理して一日の作業が終了する。

このように、ナスカの調査は、かなりハードである。しかし、ペルー人たちは、いつでも笑顔と冗談を絶やさない。また、夕方以降はみんなでフットサルをするなど、いつも遊びの時間を大切にしている。文化や環境の異なるペルーで日々を楽しく過ごしていけるのは、本当に多くのペルー人のおかげであると実感する。